

かの子撩乱

瀬戸内晴美





か の 子 療 乱

昭和40年 5月15日 第1刷発行

定価 950円

著 者	瀬 戸 内 晴 美
発行者	野 間 省 一
印刷所	豊国印刷株式会社
製本所	大 製 株 式 会 社

発行所	東京都文京区 音羽町3-19	株式 会社	講 談 社
電話 東京(942)1111(大代表) 振替 東京 3930			

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。© Harumi Setouchi 1965

か
の
子
療
乱

目
次

第十二章	第十一章	第十章	第九章	第八章	第七章	第六章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章	序章
緑	爛	波	崖	煉	な	桃	旅	向	花	隕	枯	墮

の げ 日 あ か 天

蔭	漫	濤	花	獄	き	天	路	葵	り	石	野	女
一 壘	一 七	一 三	一 四	一 元	一 三	一 六	一 八	一 六	一 五	一 六	一 三	一 七

第十三章	鳥籠	三〇七
第十四章	毬唄	三三三
第十五章	落葉	三三八
第十六章	桃源	三四四
第十七章	花道	三六六
第十八章	満願	三六三
第十九章	黄金の椅子	三八六
第二十章	やがて光が	三三二
第二十一章	いよよ華やぐ	三七七
第二十二章	薔薇塚	三三三
第二十三章	残照	三六一
第二十四章	誇り	三七八

装 幀／岡 本 太 郎
ロ 絵 写 真／吉 田 幸 子
レ イ ア ウ ト

か
の
子
療
乱

曾て、このやうな苦悩が私にあつたらうか——心は表現を許さない嚴肅な苦悩を口含みつつ、酷しく私の上に君臨してゐる。私は奴隸のやうにすすり泣きつつ、まごまそこらを取りかたづけ——取りかたづけることは小説を書くことであつた。

日記より
かの子

序章 墮天女

へあふれるほど豊かな想像力にめぐまれて、現実世界のほかにいま一つ完全な世界を打ちたてることができた、バルザックのような天才の場合、私生活の末の末に至るまで詰らぬ事実拘泥するなどということは、まずあり得ないだろう。そういう天才は、現実をなんの容赦もなく変えてしまう、その意志の専横ぶりに、一切を従わせようとする」(水野 亮 訳)

岡本かの子の火のような生涯と、絢爛豪華な文学の遺産について想う時、私にはなぜか、ツヴァイクの「バルザック」の書き出しのこの文章が浮んでくる。

バルザックは、氏もない百姓を先祖に持つ自分の出生の事実を否定し、彼自身の願望である貴族の裔だという夢想を強引に主張した。オノレ・バルザックという戸籍名を無視して、貴族の称号の「de」をつけ、三十歳頃からは、常にオノレ・ド・バルザックと、あらゆる文書に署名したばかりでなく、自家用の馬車に、自分の祖先だと称して由緒ある貴族のダントレーグ家の紋章さえ描きこんだ。

このお手盛の、むしろ無邪気な似非貴族ぶりに対して彼の生前、世間はあらゆる嘲罵を浴せし、後世の史家は根気よく訂正した。けれどもバルザックの強烈な意志と彼の偉大な文学の業績は、ついに世評や常識を征服

し、沈黙させてしまった。今ではもう、世界中の誰一人、この世界的文豪を呼ぶのに、彼の願望通り、オノレ・ド・バルザックと呼ばないものはない。

ツヴァイクはいつている。

《あらゆる後世の訂正にかかわらず文学は常に歴史に勝つのである》

昭和八年のことだった。

四年間の外遊から帰って間もない岡本かの子は、街で逢った森田たまに、いきなり興奮した口調で訴えた。

「あたし、つくづく厭になったわ。日本人って、何て不作法で不愉快なんでしょう。あたしが今、銀座を歩いて来たら、みんなこつちをじろじろ見てふりかえったりするのよ。本当に不作法で厭だわ。外国じゃこんなこと絶対なくてよ」

森田たまは返答にこまり、つくづくかの子を見た。その日のかの子の服装は、真紅のイヴニングドレスだった。背がひくく、ころころ肥ったかの子が、滞欧中断髪にしたおっぱ頭で、白粉を白壁のように厚塗りし、真赤なイヴニングを着て、白昼の銀座を歩いたのである。この時、かの子は四十五歳になっていた。

ユニークな作家ほど、そのまわりに謎めいた伝説や意味あり気な逸話はつきものだ。岡本かの子も生前から奇怪な無数の伝説にとりかこまれていた。

才能豊かな歌人であり、女流仏教研究家の第一人者として、すでに世評に高かった岡本かの子が、突然、休火山が爆発したような旺盛な勢で、小説家として目ざましい作家活動を始めたのは、昭和十一年だった。かの子の死は、それから僅か四年めの昭和十四年二月十八日に訪れている。

かの子文学の研究家岩崎呉夫の年譜によれば、

《同二十四日、夕刊各紙を通じて、その永眠を発表。通夜告別式を行なったが、この間一週間ほど喪を秘していたため、さまざまな憶測流説が乱れとんだが、これはいづれも真実ではない》

とある。年譜にまで明記された憶測流説は否定の言葉にもかかわらず、かえって異様に映り、死後二十余年を経た現在も、一向に立ち消えてはいない。伝説は伝説を呼び、自殺説や心中説など、ひそひそと語りつがれ、ま

すますかの子を深い謎の奥につつんでいく傾向がある。

かの子は漫画家として天才を謳われた岡本一平の妻だったが、二人の間に肉体関係はなかったという噂だけでも、かの子は生涯処女妻だったという説もあれば、結婚当初の、一平の放蕩時代への復讐に、かの子が生涯許さなかったという説もある。

「いえちがいます。私が聞いたのは、一平さんの放蕩時代、かの子さんが淋しさの余り一度だけ、若い人と過ちをおかしたのを、一平さんが死ぬまで許さなかったというんです。それが本当なら、一平さんは何て心の冷い人でしょう」

そんな異論も入ってくる。かの子の死の当時、地方の女学生だった私など、かの子が若い評論家と、別々の場所を決めた時間に毒をあおり、かの子だけが死んだというロマンチックな噂を、相当長い間信じこんでいたものであった。

かの子に若い燕がいたという噂。一子太郎の出生に関わる憶測。かの子の小説は夫一平の作だという噂。

ある日、長谷川時雨が、かの子とエレベーターに乗ったら、丁度先に一平が乗っていて、ぼったり顔を合せた。すると二人は、お辞儀して真面目な顔でお久しぶりと挨拶したという。そんな出来すぎたゴシップめいたものから、かの子が日頃内心ライバル視している女流歌人の歌集出版を上げられ、電話口で最大級の祝辞をのべた後、その深夜から、相手の人形をつくり、庭で丑^{うし}妬^{ねぐさい}詣りをはじめ呪ったという不気味なものまで出てくる。

奇妙なことには、まことしやかに語りつがれているこれら根拠もない憶測や噂話の中には、かの子自身の口から出たとして考えられないものもある。例えば、

「うちでは、一平と私はずっと兄妹の間がらなの、だから私は何をしていいって一平に許可されてるのよ」という同じことばを何人かの異性に話している。

これらの伝説はほとんどが、かの子の常人には想像出来ないアブノーマルな、奇想天外な言行を伝えていた。こうした単なる根拠のない噂話の外に、円地文子が、かの子の文学にも人柄にも、否定的な立場をとることを表明した上で書いた《かの子変相》という短篇がある。

《自分の愛し、或ひは愛したことのある作品や人については、どんなに毒づいても妙に安心してゐられる

が、愛したことのない、従つて溺れたことのない人について酷薄であることは骨まで凍るやうに寒いのである。しかしさうだからといって、いい加減のお座なりをいふ生ぬるつこきには、私は一層居たくない」(かの子変相)

こんなぎりぎりの心境で書かれているだけに、『かの子変相』の中の、かの子像は、田地文子の目に映ったかの子のいやらしさ、醜さ、奇矯さを一種の冷い情熱をこめて辛辣に書きつけている。この中で語られるかの子の言動は、根柢のない噂話や伝説ではなく、ある日、ある時の、實在のかの子の言動にはちがいないという意味で見逃せない。

『母子叙情』が出た時には平林さんも私も一様に嘆声を上げた。

「実に奇妙な小説だわ。化かされるにしても化かされ甲斐のある小説よ……」

「小説の形みたいなのを無視してゐる……といふよりまるで知らないで、書きたいやうに書いてゐる魅力ね」

「岡本さんはあの中に、自分の断髪を童女のやうだつて書いてゐるわね」

「素晴らしい美人でもあるのよ」

「そりや小説だから……」

「小説でもちゃんと自分と解るやうに書いてあるわ。そこが謎なのよ」

「ほんたうに岡本さんは自分を美しいと思つてゐるのかしら……」

平林さんはうむと口を結んで、思案する時の癖で眼をきつと据ゑ頭を曲げた。

かの子女史を美しいとは私は一度も思つたことがない。眼だけは強い感情が溢れてゐてともかく異常に輝いてゐるが、皮膚や体つきが粗野で着物の好みにも着方にも知的なデリカシーがまるで感じられない。幾色も俗悪な色の重なつた派手な衣裳にまとはれて、恬然としてゐる様子は、グロテスクだといふのが嘘のない現実である。

ところがそれから少し経つたある夜、ある会合の帰り私はかの子女史と同じ自動車に乗つた。車はかの子女史の青山の家へよつて、私の家へまはる順序だつた。

私たちはその時も何か小説の話をしてゐたが、ふとかの子女史はルームライトの暗い中で私の方へ顔をさしよせ、他聞を憚るやうに小声で私語いた。

「ねえ円地さん、小説を書いてゐると、器量が悪くなりはいしないでせうねえ」

その声は心配さうにひそまつて、吐息のやうだつた（かの子変相）

ある日、長谷川時雨、平林たい子、森田たま、板垣直子、等々の女流作家の集りの中に円地文子もかの子も加つていた。その時、かの子は、一平が自分をいかに敬愛しているかという話をしだした。

「私がね、少し帰りが晚かつたりすると、顔をみると拝むのよ。ほんたうに拝むの。有難いんですつて……それはねえ。私が器量がいいとか、才能があるとかいふためではないのよ」

拝むのよといふことばを、照れも臆しもせずに、持ち前のゆるゆるした口調でいつた。

その時、また、かの子はらんらんとした眼でみんなを一人一人みまはした後、

「私、この中に好きな人がたつた一人ゐるのよ」

といつた。誰もかの子に愛される一人になりたいとは思はないが妙な籤を引かされたやうな気分にはなつた

その後数日して、円地文子が森田たまにあうと、

「岡本さんて気持がわるいわ、あの日の帰り道にそつと私の傍によつて来て、さっきこの中に好きな人が一人いるといつたの、あなたのことよつて凝つと私の顔をみるの」

といつた。それからまた何日かして円地文子は平林たい子に逢つたので何気なくその話をする、平林たい子は、怒つたやうな顔で聞き終り、ふうむと深い息をついて、

「そうですか……実は、私もあの帰りに岡本さんに同じことを言われたのですよ」

といった。二人は大きな声で笑ひだしてしまつた。四十も半ばを過ぎたかの子の、白痴的ともいえる幼稚な言動と、あの妖麗博識の豊かな作品群とどこで結びつくのか。

一平の記録によれば、かの子は人並より早く生埋の訪れがあり死の病床までそれがつづいていたという。

それほど旺盛な体質を持ちながら性格の一部には、童女のまま育ち止った面があったようだ。

人を信じ易い天真爛漫な性格のエピソードとして、村松梢風の《近代作家伝》に伝っているのは、ある時、岡本家へ出入りの青年が、たまたまかの子の手作りの卵焼のご馳走になったので、一応儀礼的に美味しいとお世辞をいったら、かの子は無条件にその言葉を信じて大喜びで、

「あら、そうお、じゃ、もう一つ変ったものを作ってあげましょう」

と、いつて、すぐ次のご馳走をつくってくれた。青年はこれもほめざるを得なくなり、また美味しいといった。

「あら、そう、じゃもう一つ」

かの子はますます上機嫌でまたいそいそ次の料理をつくった。あとからあとから、ほめる度、際限もなく料理をつくって、とうとう夜半の三時までご馳走せめに逢ったという。多分に誇張のある話としても、かの子の純情な、お人好しさかげんと、何事に対しても体当りでひたむきな熱情を、限度もなくかたむけつくさずにはおれない一面がうかがえる。

要するに、かの子の感情も行動も、物事の両端をゆれ動き、その振幅度の広さは常軌を逸した感を世人に与えるらしかった。中庸を欠く平衡感覚の欠如、強烈なエゴの示顕欲、王者のような征服欲、魔神のような生命力、コンプレックスと紙一重の異常なナルシズム……そんなものがかの子の体の中には雑居し、ひしめきあい、その結果、外にあらわれる言動が世間の常識と波長が合わなくなるのである。

奇矯と見られ、きざとさげすまれ、批難と誤解にあう度、かの子は世間との違和感に打ちのめされ、終生、苦しみつけなければならなかった。

幸いかの子は全世界を敵に廻しても恐れなくていいほどの、強力な理解者に恵まれていた。夫一平と、一子太郎である。

《だが母親のこの到底尋常では考えられない激しさ、重厚さを、さすが初めはかなりヘコタレていたらしいが、たった一人岡本一平が正面から引き受けたのである。母親の中にある非凡な純粹こそ本当に守らなければならない資質だと見抜き、それに殉じたのである。実際に岡本一平なしにはかの子は決して大成しなかったであろうし、余りにも彼女からかけ離れた大正、昭和を通じての雰囲気の中に、生きつつける事は出来な

かったに違いない」(思い出すこと)

太郎のこの洞察以上に、これまでかの子を理解したものはあらわれていない。一平にとっては、他人が、奇矯と観じ、為にするわざとらしきと見、人気取りの技巧と受取るかの子の言動のすべてが、かの子のたぐい稀な、純情から生れる天衣無縫と映るのであった。童女がそのまま大人になったような稚純さが痛々しくどうにもいじらしくてならないのである。

「女史の他から帰つたときのだらしなさ、玄関の硝子戸を破れよとばかり叩く、それは追剥から逃れ来るものの如く、百年流浪の故家に帰るものの如くである。そして「パパ様——」と続け叫ぶ。毎回新である。隣、近所などはあれども無きが如くである。戸を開けてやると、私の胸に飛び付くことが往々ある。そして「帰つて来たのよ来たのよ」といふ。おお、それが僅か丸の内辺の集会から帰つて来ての仕打である。だが私ともかの子を何処へでも、出して遣つた間はずとも不安だ。それをいま確と胸に受け戻した。私の胸は男としてさう強い胸ではない。それをしも心が許せる塙として飛込んで呉れる。私は嬉しくて涙ぐむ。そしてこの大きな童女の肩肉を揉みほぐすやうに撫でてやり乍ら「よく、帰つて来たなあ」といつてほつと安心の息を吐く。二十有八年間これも毎回新である。

女史を外に出してやつた間の、私の不安といふものは実に單純素朴なものだ。車に轢かれやしないか、迷子になりはしないか、へまをやりはしないか、よその子に苛められやしないか、誘拐されやしないか、物を落して不自由してやしないか。その心配がをさな子に対するもののやうに、單純素朴であるだけにまた端的である。そして女史なるものにも、私をしてかう心配させる閑歴が無いことはない。物はよく落すし、行動は遅々として、小取廻しは利かないし、人を正直に信じて逆手や皮肉には弱いし、こまかい利便の途を知らない」(解脱)

一平にとっては、何時までたつてもかの子は、内っ子の子供であつた。かの子は喜怒哀楽の表現も徹底して尋常一様でなく、泣く時は、童女のように、髪も着物もふり乱して一平の胸にしがみつき、「パパア、パパア」と慟哭する。当時岡本家の近所に住んでいた村松梢風はよく御用聞から、「今、岡本さんでは、かの子先生がワアワア泣いていらっしやいます」

という報告を聞いたと、近代作家伝に伝えてある。かの子の喜ぶ時はまた手放して、その天真爛漫さもまた人界のものとも思えない。怒る時は、女夜叉のようになって手のつけようもないほど荒れ狂う。人から贈られた高価な反物でも、ずたずたにきりきざんでしまったりする。

これらすべての場合のかの子が、一平には哀憐の対象となった。が何よりも心を締め上げられるほどのいじらしさを感じるのは、かの子が持って生れたとも見える無限の憂愁の翳であった。その翳は、人間が生れながらに背負わされて来た久遠以来の諸行無常の業、つまり人生のあらゆる矛盾相剋、不如意の運命について思いを凝らすことから来る憂愁の翳であった。

「どうしたらいいだろうなあ」

声に出して歎き、涙をながす。その時だけは一平にも手をかしてやりようがない。かの子ひとりの歎きであった。一平は苦しんで悶えるかの子を見守り、いっしょに泣いてやるしかない。

するとかの子は、

「パパも泣いてくれるの」

と、いっていつそう激しく泣くか、

「パパも泣いてくれるなら、もういいや」

と、けろりとするかである。そんなかの子が、一平の目には次第にこの世のものとも見えなくなってきた。

《私は昭和七、八年の頃、かの女を見て、どうあつてもこの女は、普通の人間らしくないといふ感じに撃たれました。あまりに無垢でばつとしてゐる顔や手から、私はふと博物館にある、淨瑠璃寺吉祥天の写しが思ひ出されました。早速、その像の写真を取寄せて見較べると、瓜二つなので感興が湧き、油絵で「吉祥天に象れるかの子の像」を描いて、春陽会へ出品しました。——中略——私はこれを描いてるとき、つくづく思ひました。この女は私のやうな下品の人間や、貧弱な生活の家へ、来る女ではない。誤つて、私のもののやうなところへ来たので、ひどい苦勞をさせた。墮天女だてんによといふ言葉があるが、確に墮天女だ。——中略——實際この時代のかの子は、天部の面影がありました》（かの子と觀世音）

常我淨、華果充滿の天国にこそ住むにふさわしい無垢の心身を持って、どうしてこの娑婆に墮ちたのだらう。